



連歌
白髮集
付古今伝受

伊地知文庫
文庫20
208



文庫20
208

白髮集

伊達邦三書



夏月十八切字の事

かたきうかりのよせせあは
志やまはなぬをみし魚

かたきうかりのよせせあは
志やまはなぬをみし魚
し
松喜一かきよはなぬをみし魚
し
松喜一かきよはなぬをみし魚

世の世や水はぬき

る世も少くはるの世なるらん月樹
秋の月 露の世は世の秋なる
深は世の世なる 世の世の世なる
露や世の世なる 世の世の世なる
水は世の世なる 世の世の世なる
花は世の世なる 世の世の世なる
一帯の世は世なる 世の世の世なる
月は世の世なる 世の世の世なる

し 庵 衆 挽

よまゆしらす世の世なる
雲や世の世なる 世の世の世なる
うけりし世の世なる 世の世の世なる
月は世の世なる 世の世の世なる

やううの世の世
水は世の世なる
雲や世の世なる
世の世の世なる

その世の世なる

の　　し　　ひ　　ま　　る　　の　　洞
よ　成　敷　の　こ　と　ん
そ　あ　る　せ　ら　る　の　也
せ　く　し　ま　る　の　成　敷　じ
況　と　ん　の　洞　あ　り
し　く　お　あ　の　洞　じ
き　く　の　と　く　あ　ら　る　の　洞　じ
は　あ　ら　る　の　洞　あ　り
ぬ　く　や　し　と　ん　の　事　じ

み　く　し　の　洞
し　推　量　の　こ　と　ん
色　さ　し　の　洞　じ
宗　が　ら　る　の　洞
す　か　ん　の　こ　と　ん　じ

海　は　海　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ
あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ
あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ
あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ
あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ　あ　ら　る　の　洞　じ

却我人のせいきりしはうりかたはあぢ
道しす自心ぬ箱とあうりお間にし
決りて改めるとなれん油七葉書たのめ
はあひて有し時自も汝よりらひて
はく笑しよる言顔もは後句と志願ひ
そ句

月ハと乾おののむのしこ人ま

と侍りつるハあてをあらやと云しよと加
はくく屋のありてあひそひにひりて

いよと志すおと十八相傳をぬよよりて終り
あひてまねるあれ思十八有あうりそ名を
かづつる乃十八字をひり。せいありとせと海
あすするしと侍る汝をあはれはくし
海安成るなるは髪白く老人の海みえ
さ葉流あよよりて白髪集しあし
と書よる人よ上書汝我の印一人の手にも
流るは流るき初はたもあもやも母か
云ハまといと云

まゝ初めや七の成り

きりや ちりやあししんははるんかきし
 中のや ちり帰ん雲やうすくに日むくして
 ちりや ちりてあまのさへーとあひまや
 ちりのや ちりくやちりすつちかてとまらしん
 ものや ちりくやちりく月よるちりく
 角のや ちりくやちりくあまのちりく
 口谷のや ちりくやちりくみるちりく

ちりや ちりくあまのちりく
 中のや ちりくあまのちりく
 ちりのや ちりくあまのちりく
 角のや ちりくあまのちりく
 口谷のや ちりくあまのちりく

中のや ちりくあまのちりく
 又説しちりくあまのちりく
 ちりく

指のよむにむし事

そ じりまきとまゆの 袖むいて

の 里ノ子にふかき ちりまき

よ じりまきとまゆの 袖むいて

ちりまきとまゆの 袖むいて
じりまきとまゆの 袖むいて
ちりまきとまゆの 袖むいて
じりまきとまゆの 袖むいて
ちりまきとまゆの 袖むいて
じりまきとまゆの 袖むいて
ちりまきとまゆの 袖むいて
じりまきとまゆの 袖むいて
ちりまきとまゆの 袖むいて
じりまきとまゆの 袖むいて

一 ちりまきとまゆの 袖むいて

よ じりまきとまゆの 袖むいて

を 月もあきと秋は 福えのまき

も 又よめあきと 秋は福えのまき

も 月もあきと秋は 福えのまき

ぬ 又よめあきと 秋は福えのまき

は 月もあきと秋は 福えのまき

ちりまきとまゆの 袖むいて

一 五文無文也歌

一 ありと智と二家也

せりあり
きさひあり

きさひありしによを文の句

流此ひくさのちくきこゆる

月ようく山あはしの森あり

あやうさしりし秋おとをく

流のりり新得の雲の風あり

せりありし無文の句

秋志くれゆく秋よこをあり

月ようく雲の月の新あり

若の丁路もハ春とくしとあり

桜きく山の陰もハ伝あり

一 うまてにもの事

来てくやうたのこをたさあり

出くありいくつありらん様あり

か海流をよけけりも伝あり

形もそハ伝れ下のおきり川浪

一 かき福の事あり

いづくありしハありまあり

あきくく若あり新の板あり

道しらのハサ彩の友もまて志をし
げもたえんあきうて山又くよりり
一 引ち久竹の事

山よそもてうきハタラキ
海士人のちにとまくらん松の尾
月よハいとあなめむし雲
花よえん一葉の跡きとさひり
一 うげく竹の事

まじまをまつちり山う野のた
くのちも月のをきよハとまらるて

若海ハいよとまこみりり
秋のちく園のあをさや志くらん

一 心竹の事

うそくしてゆくはかりり
志ほくらてテ深や海とあかえ
若海やあしくいたり形人
あのかしは月とまよよあめりて

一 祐竹の事

戸原よとあきうてのまけり
月の江新海よまきあはぬて

花の上より春ハぬケより
花のよハるゝ 志乃山みえて
一 風情の事

あこまりの身ゆゑに春よたきて
まゆゑのつらと見えや清き
一 詩の心算の事

川に舟をすすきまほりあり
橋ありばあやしくともあはれ
一 かけてみんのか

夏川の石倉の水のこゝろ
あつたあはれとつむき
傳云是を汝よまゝに西佐の初め
よハる生はせの器くる巻一
志乃山へ

享保二年二月十日 相傳也
右は道極秘也深き函底不可許他見
富小路氏在郷相傳之以正本写之
弘治三年七月日 宗砌

十九てめとん
志乃山了れらるゝ海
大ま

五月雨ハとききの志乃山
ふれや

神國開闢和歌之根元

二神唱和傳

八雲神詠傳

御賀靈之傳

同八句之傳

喜哉遇可美少男

喜哉遇可美少女之傳

陰神

阿那宇禮志尔陪屋宇麻志雄登古尔安比奴

陽神

阿那宇禮志尔陪屋宇麻志雄登古尔安比奴

阿那ハ托詞ニテ深ク嘆スルノ訓也宇禮志トハ
悦ノ訓也尔陪屋トハ加那ト云訓ニテ助語也宇
麻志トハヨキト云訓也食物ノ味ヒノヨキラ宇麻
志ト云同事也雄登古尔安比奴トハ陰ノ陽ニ會ラ
去也支陽ハ進ニ陰ハ退キ陽ハ先夕午陰ハ後ル也
理ヲ始ルハ陰也理トハ万物ヲ産ヘキノ理也事トハ

万物ヲ成ス所ノ夏也産ヘキノ理トハ陽神曰陰神
ハ右ヨリ廻シ吾ハ左ヨリ廻ラント命シ絡フ是陽
理ヲ始ルノ先也陰神先唱ルハ事ヲ始ル所也陽
万物ヲ産ヘキノ理ヲ始ムハ陰和セスハ陽ノ種
受ル^{陽ノ字可成}トナシ然ルニ陽ト陰ト一度ニ喜号則乱也
故ニ陽ヨロコヒスソ又廻テ陰先唱^{陽ノ字可成}ハ陰後ニ和ス
是ニ依テ万物成也皆是天地自然之理也陰先
ヨロコハ子ハ陽氣ヲ受ス陽唱テ陰後ニ和セ子
ハ物ノ形ヲ成サス陰ハ陽ヲ受テ物ノ形ヲ成ス故
先後ニ陰ヨロコフハ常也

右陽神唱十八字陰神ノ唱十八字ノ假名
三十六字ハ和歌之根源ナリ然ルニ今三十一字ヲ
用ルハ八雲ノ神詠ヨリコノカク也素戔嗚尊奉
六字ヲ五字ヲ去テ五句トナシ玉フ其故ハ陰陽神
万物ヲ産ヘキ唱和五段也先一段ハ陽神左ヨリ
廻リ陰神ハ右ヨリ廻リ玉フ是也故ニ歌上ノ五文
字ニテハ物ノ發テ言出ス也二段ハ陰神先唱
フル是也故ニ上ノ七文字ニテハ事ヲ普ク言出也
三段ハ陽神不悦ト云改旋是也故ニ下ノ五文
字ニテハ上ノ理ヲ言分ル也四段ハ陽神先唱

是也故二下ノ七文字ニテ上ノ詞ヲ又言テ心ヲ述
ル也五段ハ陰神後和是也故二下ノ句ノ七文字テ
惣ヲク、リテ言顯シ成就スルヲ歌ノ善トスル也
歌仙三十六人ニ定ルハ陰陽二神ノ唱和三十六
字ノ數ニヨリテ定之也本文ニ本文ニ陰神ノ和
ヲ載サルハ文ヲ省ク也陽神先唱テ曰トアルトキ
ハ陰神ノ和アルトヲ知ヘキ也

八雲神詠之傳

夜久毛多都伊豆毛夜蔽賀岐都麻其微
尔夜蔽賀岐都久流曾能夜蔽賀岐表

右此ノ

御歌ハ二神ノ唱和三十六字ノ神詠ヲ本歌ニシテ讀
玉ヘル也夜久毛多都トハ八雲立也大蛇ヲ斬リ
給ヒテ万民ノ苦ミ止テ天下穩カ也而云々千ノホル
ヲ云也雲ハ地氣也伊豆毛トハ常任ノ義也此ノ
神詠ヨリシテ後世其地ヲ出雲ト稱サル夜蔽
賀岐都麻其微トハ八重垣妻籠也八重垣ノ
内ニ妻ヲ納ルノ意也陰陽二神八尋ノ殿ニ坐
マシテ万物ヲ産玉フモ素戔彥鳴尊八重垣内
妻ヲ籠ル一理也八重垣トハ即八隅也八尋殿

ト云ニ同シ夜蔽賀岐都久流トハ八重垣造也民
苦ムル大蛇ヲ斬テ天下ヲ治メ玉ヘルヲ云也其ハ
重垣ノ其ノ字陰陽ニ神ハ尋履ヲサス陰陽
ニ神ハ尋履ヲ化作シテ万物ヲ產玉フ今
素戔嗚尊大蛇ヲ斬リ其夜蔽賀岐ヲ造リテ稻
田姫ヲ納トモニ佳玉フトナリ
伊弉諾尊ハ伊弉冉尊ニ會テ八尋履ヲ化作シ
素戔嗚尊ハ稻田姫ヲ得テ八重垣ヲ造リ玉フ
此皆是國玉ヲ治メ造ルニ陰陽和合ノ理ヨリ起
ルコトシカリ

一 夜蔽賀岐ノ賀ノ字清濁之事

上ハ皆素戔嗚尊ノ御心ト御詞也故ニ皆濁ニ
曾餅夜サ蔽賀岐表ノ七文字ハ陰陽ニ神ハ尋
履之変ヲ述玉フ也故ニ清ムヘシ天ノ事ハ清ニ地
ノ事ハ濁ルノ謂也

四 妙之変

一ニ字妙ニニ句妙三ニ意妙四ニ始終妙是也一ニ字
妙トハ三十一字ハ一月三十日ニ応窮リテ又一日ト變ス
天道ノ循環無窮之數ヲ示ル也濱ト眞砂ハ

筭へ尽すと七此風 舞ハ正躬リナカハハシニ三句妙
トハ一首ヲ分テ五句トス是即チ五行ノ数也万物
此五ツヨリ出生ス三意妙トハ天地ヲモ動シ鬼神
ヲモ感セシムル也四始終妙トハ此舞神代始リ
テ末世アラシカキリニ至ル迄大盛ニハ始終妙也

四重之十支

第一逸妙二字ノ大支

第五句ノ頭也曾能トハ陰陽ニ神天浮橋ニ降
玉ヒテ喜哉ト詠シ玉フ其意ヲ得テ詞ニ顯シ詞

ヲ数ニ作シリ詞ニ顯ストハ八尋殿ヲ化作ト云ト
八重播ヲ作ルト云ト同シキ也数ニ作ルトハ陰陽ニ
神ハ一年ニ十二度ノ會アリ會ハ晦日也三十一字ハ
晦日三十日ニ會メ又一日ト始ル数也

第二陰陽神詠数之十支

陰神

阿那宇禮志尔隋屋宇麻志雄登古尔安比奴
陽神

阿那宇禮志尔陪屋宇麻志雄登古尔安比奴
此詞ノ数十八字陰陽ノ二首ヲ合セテ三十六字也

是ヲ五字除テ殘ル三十一字五句ニ作ル也五字殘
リタル五行ノ題目也三十一字ハ陰陽二神ノ循
環ニ當ル也是妙ノ至極也

第三十八字妙支配之火支

眼根 耳根 鼻根 舌根 意根 是無心之心也
色境 声境 味境 觸境 法境 是有心之心也
眼識 耳識 舌識 身識 意識 是感應之心也
此三ツヲ合セテ三十六ノ十八ト成ルナリ

第四十八意妙支配之火支

阿那眼根風 宇禮志耳根賦

尔陪屋鼻根比

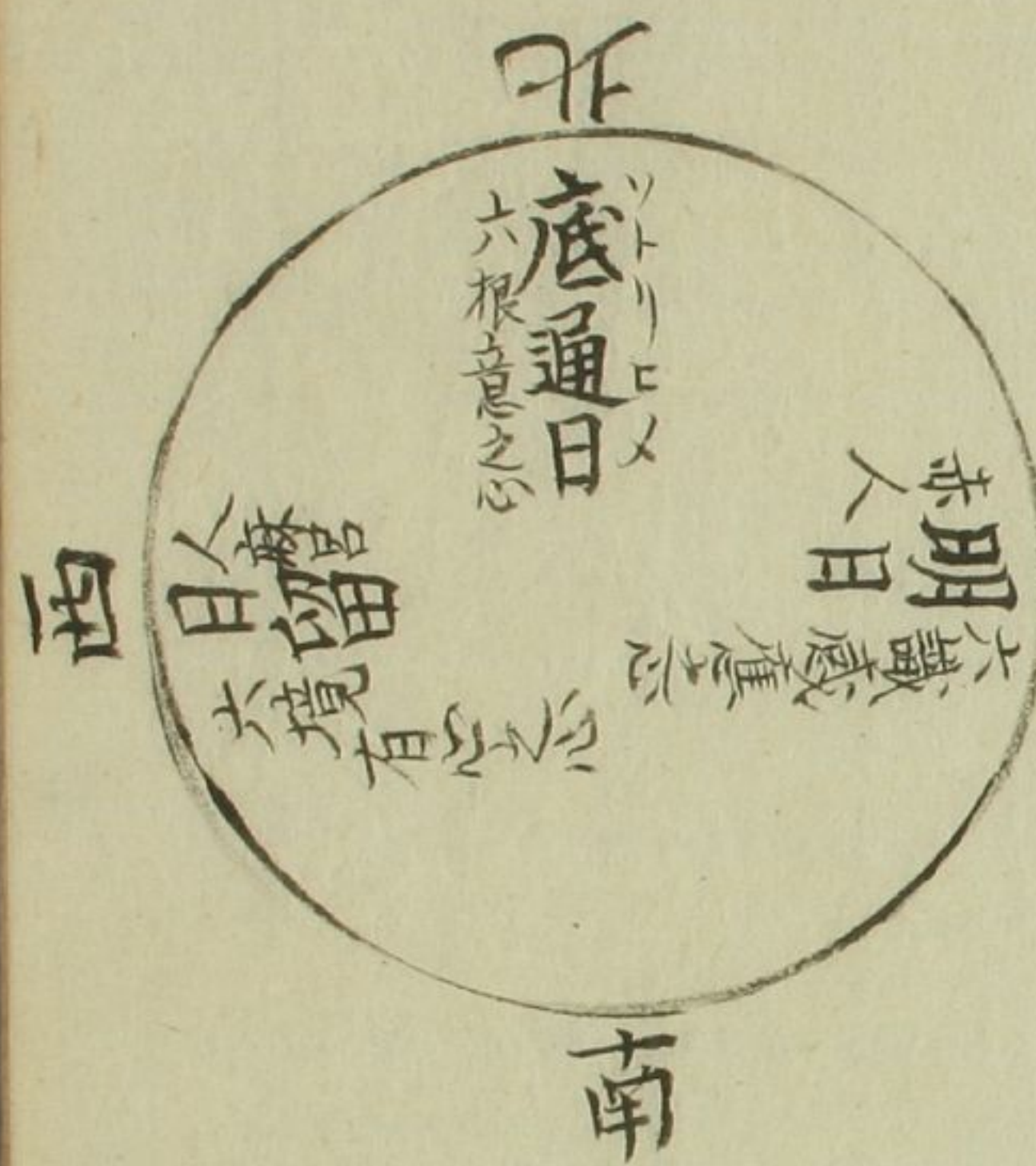
宇麻志舌根真

雄登古尔身根雅

宇比奴意根頌

右四重之支終

和歌三神三聖之重位口决之火支



住吉三神ハ日神ノ御異名也譬言ハ夜ハ日光北方へ
遠リ坐ス是即地ノ底ヲ御通遠坐ス其時ハ
底筒男ノ神ト申シ又ハ底土命ト申ス此時ノ
氣ヲ受テ衣通姫生シ玉ヲ故ニ歌之風無心之
心也衣通姫ハ底土命ノ化現也衣通姫ト底通
日ト同訓也

東ヨリ南ニ現シ坐ス時ヲ中筒男ト申シ又ハ赤
命ト申ス此時ノ氣ヲ受テ赤人生ル也故ニ歌ノ風
感應之心也赤人ハ是赤土命ノ現化ナリ日ノ始テ
東ニ出ルハ明日也赤人ト同訓也

南ヨリ西ニ現シ坐ス時ハ表筒男ノ神ト申シ又磐石
土命ト申ス此時ノ氣ヲ受テ人麻呂ハ生ル也故ニ
歌ノ心有心之心也人麻呂ハ磐石土命ノ化現也日ノ
西ニ留リ入ルハ日留也人麻呂同訓也如此和歌ノ
三聖ハ是住吉大明神之化現ナル故ニ和歌所之
本尊ニ住吉大明神ノ神号ヲ懸ル也其時ハ三
聖ノ像ヲ懸サルトナリ三聖之像ヲ懸ル時ハ
和歌浦明神衣通姫ヲ中位ニカケ人丸ノ像ヲ
左ニカケ赤人ノ像ヲ右ニ懸ル也

右取録陰陽二神之唱及素戔嗚神詠
神国用語之蘊奧卜氏傳來深重秘
極之書也謹而不可容易不可有怨者也

井可汲 朱判

傳授

津田信貞殿

御賀靈木日嗣八句之傳

葦原中國^ハ是吾子孫^ノ可王^キ之地^ニ皇孫就而

治^シ焉^セ行^キ矣^ニ 宝祚^ノ之隆^ニ 當^レ與^ル天地^ト 無^ク躬^ニ者矣

右

御即位時柵ヲ長ハ八寸徑一寸二分切テ八角
削リ此文ヲ一面三句ツ、書テ錦ノ御袋ニ入テ
御即位ハス王子ノ御守護ニ撰サセ奉ル是ヲ御
加具靈木ト申奉ルナリ御加具ハ祝ノ字ノ意
靈ハ天照太神ノ御靈也

咒詛八句之傳

今何故来^マ 取^テ矣^ヲ而咒^ス 以^テ惡心^ヲ射^ス 則天稚彦
必當遭害^ニ 以平心^ヲ射^ス 則當無恙^ニ 因還投^カ之^ヲ

右是ハ

朝廷へ歎スル者アル時其歎人ヲ像ヲ畫テ帝
宝劔ヲ取セウシ内侍所ヲ背ニシ玉ヒテ右八句ノ
内ヲ六句ヲ唱ヘ玉ヒテ宝劔ヲ其像ニ刺立玉也
其六句ノ唱ヘヤウム今何故歎^ス以惡心^ヲ歎^セハ
則平將門 必當遭害^ニ 以平心^ヲ 則當無恙^ニ

ト是ナリ平將門朝歎ノ時ハ如此唱玉フ平高
時ノ朝歎ノ時ハ則平高時ト唱玉フ取矣而咒
因還投之ノ兩句ハ御心ノ御守念也

右ニテ条之大支者朝廷之外無奉授之極
重秘書也謹可有恐者也

卜部從信 判

御加賀靈日嗣之傳並咒詛八句之神言者

天皇授受之心法朝歎退誅之妙語也

極秘甚重ノ一書也必勿觸凡見云云

明應九庚申年八月三西御判
御傳受

文龜三癸亥年四月十八日右秘書並切紙
御傳受之時以御自筆之本書寫之

法師宗祇

天和元辛酉年十月初八日傳受藤遠公
自筆之以正本寫之即日校合畢

相傳切紙
一 御賀具の本の事

天照太神の天磐石戸は同ツルと流り一時
法弁集り流り柳の上は枝は八玉と懸中
は枝は八流と下は枝は八白布綿と懸
く神托ひ一流り也其流を柳と柳
御賀具本と云也是ハ神の御魂を置と云
義 三種の神器の義に因りて秘伝事
一 一門毒産にけ流り花の事

女戸ハ毒産あり昔流すと名らん作事とし
てかきりりしとれを神玉の玉にたとへて

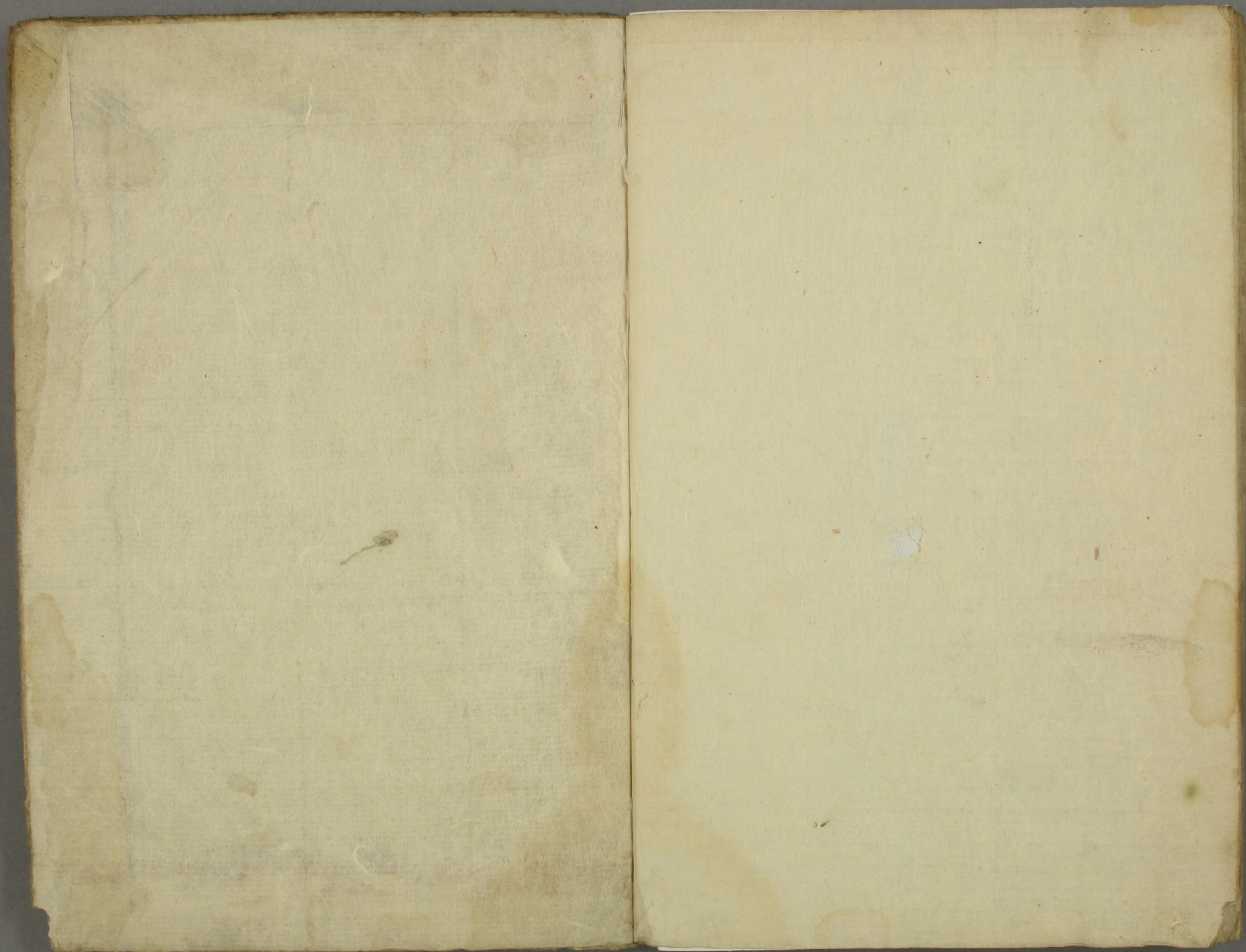
一加和各種の度

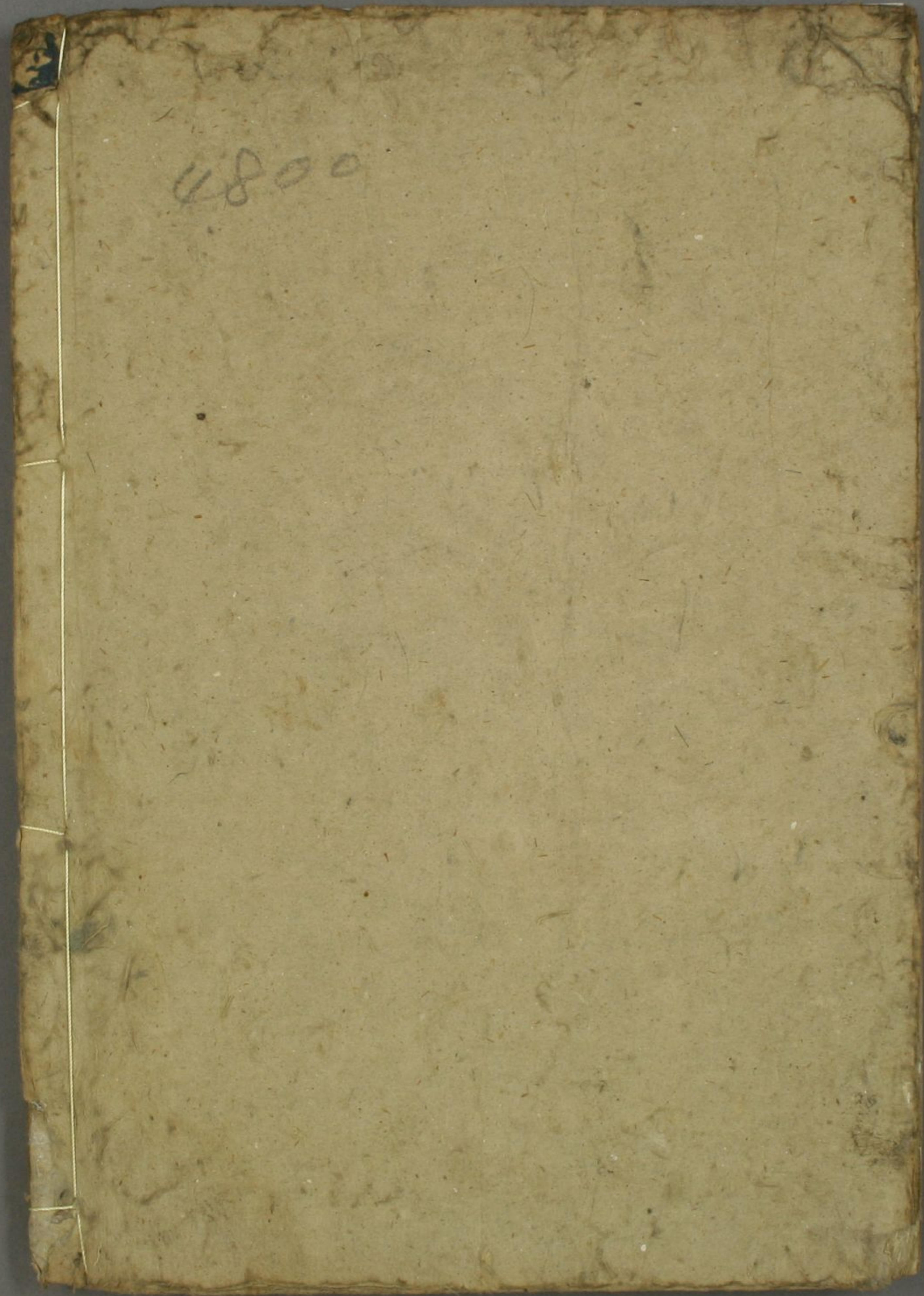
云り也け戸は玉と云ふ事ハ女の陰戸は
たるとして陰は用いあは陽は用也天照
太神素戔嗚尊と玉と劍と云ふ事
事ハ陰陽和合の心也陰陽和合ハ柔和
の美なりまね玉ハかゝり圓よりて柔和
なり所ハ意如也是即神皇の心也素戔
戸と女神と云ふ事ハはまるとも清同訓也
かゝる事ハ河骨也此草水よせしむ水ハ
元來清きものなりそ上にけあけり事
なりまねハ劍きの心よけへりまねは清き
心の向直なりハ征伐と云ふ事ハ宝劍の去
実なりねん如け事也

右三ヶ條之相傳切紙ハ切紙中之才一秘事
是深也可深秘敬上重者也

井可汲判

津田信貞殿





4800